

41 イレウスに対する高気圧酸素療法と他の治療法の比較検討

金城和寿 清水徹郎

札幌徳洲会病院

我々の施設では2000年より第一種高気圧酸素治療装置を導入し、さまざまな適応疾患の治療に使用している。一般外科・整形外科の適応疾患が多く、中でもイレウスは最も症例数の多い疾患である。当初はイレウス症例に対してその有効性が不明であったため、従来のイレウス管・経鼻胃管による腸管減圧を併用することが多かったが、近年はその有用性が各科医師に一般認識され、現在では7割近くの症例に対しHBOTが施行されている。イレウスに対するHBOTの有用性を客観的に評価するため、HBOT導入期前後(1999～2000年)とHBOTが一般化された2001年から2005年の5年間のイレウス症例に対し治療方法とその予後を比較検討した。HBOT導入後イレウス管症例は激減している。手術症例の占める割合はHBOT導入前後でほぼ変わりなく、イレウスの保存療法としてのHBOTは有用であるといえる。

一方で緊急手術が必要な重症例や器質的狭窄が明らかな症例などに関しては漫然とHBOTを行うことは妥当性を欠くと考えられた。

42 高気圧酸素治療が有効であったと考えられた腸管囊腫様気腫症

上森光洋 樋口一人 羽生真二郎 藤崎隆志
伊集院裕康 有馬 剛 厚地良彦

天陽会中央病院 高気圧酸素治療室

【はじめに】イレウス症状を伴う腸管囊腫様気腫症に対して高気圧酸素治療を施行した1症例を経験したので報告する

【症例及び入院までの経過】55歳男性 職業 甲板手
既往歴：平成4年不整脈 平成7年頃より糖尿病にて通院中。平成16年5月末より臍部および右下腹部に腹痛あり、市販の正露丸を内服したが軽減しない為、平成16年6月7日来院。腹部MDCT上、腸管囊腫様気腫症と診断す。

【経過】腸管ガスが多くイレウス症状を伴う為、同日より高気圧酸素治療を開始した。高気圧酸素治療6回施行し、腸内ガスは減少しイレウス症状は緩和された。第4病日に大腸カメラを施行し腸管囊腫様気腫症を疑わせる所見を認めた。CTで改善傾向を認めた。

【結論】腸管囊腫様気腫症は比較的珍しい疾患である。その治療法は無治療で軽快するものも有れば、イレウス症状を呈し手術を要するものもある。高気圧酸素治療は静脈血中ガス分圧を低下させて気腫からのガス吸収を促すとされる。本症例においても高気圧酸素療法は有効であったと思われた。